

令和4年度入学試験問題（前期日程）

# 小 論 文

（中等教育教員養成課程 社会科専攻）

## 注意事項

1. 解答は、すべて別紙解答紙の指定の箇所に横書きで記入すること。
2. すべての解答紙に、必ず受験番号を記入すること。

【問】 コンスタンティヌス帝（在位 306 ～ 337）は、313 年にミラノ勅令を發布して、キリスト教を公認し、330 年にコンスタンティノポリス（現在のイスタンブール）に遷都します。これ以降、それまで迫害されていたキリスト教が徐々に勢力を拡大し、異教（ギリシア・ローマの伝統的な宗教・文化など）に圧力を加えていきます。問題文は、そのようなローマ帝国を舞台に、「背教者」と呼ばれた皇帝ユリアヌス（在位 361 ～ 363）の短い生涯を描いた長編小説からの引用です。問題文【A】【B】を読んで、問いに答えなさい。

【A】 エウセビウスは歯をくいしばるようにして海の遠くを見ながら考えつづけた。

「とすれば、まず宮廷を完全に教会の勢力の下に置かなければならないのだ。宮廷のなかから、キリスト教に反対する勢力を一掃するよう力をつくさなければならぬのだ。寛容令が出てまだ 20 年にしかならず、異教の勢力は頽勢たいせいにあるとはいえ、いつ燠おきが燃えあがるように火の手をあげないとはいえないのだ。宮廷に力を得るとするのは、何も権力にこびることではない。この異教との戦いを、もっとも激しく、もっとも効果的にすすめることなのだ。このことを忘れていたとは……このことを忘れていたとは……」

老司教は一瞬、身体を前に倒して、壁の握り金具をぐっと強く握りしめた。街道の敷石の角にあたった馬車の車輪が、すさまじい音をたてて跳ねあがり、しばらく片方の車輪が空転きしして軋きくんだからだが、同時に心に噴きあがってくる危惧きくと悔恨と焦燥とが彼の身体に震えるような衝撃を与えたからである。

「もしこんどの呼び出しが、そうした公認取り消しなどとは何の関係もなく、いまの危惧きゆうがまったくの杞憂きゆうにすぎぬとしても、私は、この前提となる第一の仕事を、もはや決して忘れまい。忘れぬどころか、それを他のすべての仕事の基礎に置くことを誓わねばならぬ。宮廷の異教を追放すること、宮廷をゆるがぬキリスト教の城砦じょうさいとすること、権力者たちを教会に心服させること、それに反する要素があれば、どのような手段を用いても、それを取りのぞくこと——これが第一の仕事なのだ。これだけが他のすべての活動を支える基盤なのだ。これだけが何よりもまず必要なのだ」

エウセビウスはほとんど口に出してつぶやいている自分には気がつかなかった。彼は轟々ごうごうと疾駆する馬車の響きに抗あらがうように、最後の言葉をもう一度はつきり繰り返して

言った。それから顎<sup>あご</sup>をひき、じっと青い入江の遠くを見た。そのとき老司教は、自分の身体に、なお、ローマ軍団に身を投じていたころの、激しい血のうずきが残っているのを、はっきり感じた……。 (辻邦生『背教者ユリアヌス』第1章 大いなる影)

(注) エウセビウス ニコメディアの大司教。幼少時のユリアヌスを監視する。

【B】リバニウスの学塾は、古典に造詣<sup>ぞうけい</sup>の深いある裕福な商人の客間を借りて開かれていた。モザイク張りの床と大理石の柱があり、壁には神話の場面を示す壁画が見られた。広間は庭園に臨み、そこにプラタナスの巨木が枝をひろげていた。部屋に入りきれない学生たちは、庭園をかこむ廻廊<sup>かいろう</sup>にあふれ、そこに坐<sup>すわ</sup>って部屋のなかから聞えるリバニウスの声に耳をすました。

リバニウスは40を越えたばかりの、髯<sup>ひげ</sup>だらけの、豪放な感じの学者で、その弁舌には、豊富な語彙<sup>ごい</sup>と色彩のゆたかな映像とともに、一種の酔わせるような調子があった。青年時代をアテナイ（アテネ）で送り、音楽や酒を好んだと噂されたリバニウスには、そうした髯や豪放な外貌にもかかわらず、どこか眼のあたりに柔和な光がただよっていた。

リバニウスは学生たちの前をゆっくり行ったり来たりしながら、人間はいかに自らを疑うことを知らなければならぬか、について語っていた。彼は時おり立ちどまり、自分の内部をのぞきこむような表情をして、しばらく言葉を切ることがあった。そんなとき広場の静寂が急に重く学生たちのうえにのしかかってくるようだった。

「人間が到達しえた最高の真理でさえ、われわれはなおそこに、それを疑いうる余地を残さなければならぬ」リバニウスは髯を右手で触りながら話しつづけた。庭園のプラタナスの葉が乾いた音をたててひとしきりゆれた。「もしわれわれが真理を唯一無二のものと信じて、それを疑うことをしなければ、われわれは間もなく真理を絶対視するあまり、それを再度検討する機会を失うにいたる。それはあたかも完全に無謬<sup>むびゆう</sup>なものごとく罷<sup>まか</sup>り通り、人々は最後にその前に跪<sup>きはい</sup>拝するようになる。だが」リバニウスは言葉を切り、自分のなかをのぞくような眼をした。プラタナスの葉がさやさやと鳴っていた。「だが、人間の手になるもので無謬なるものがありえようか。否である。われわれが唯一無二と信じる真理でさえ、それは人の手になるものである以上、無謬ではありえない。諸君は問うであろう、では、真理とは、人間が拠<sup>よ</sup>って立ちうるものになりえないのか、と。

たしかに一見すれば、<sup>あやま</sup>謬りを含んだ真理とは、語の矛盾以外の何物でもない。だが、それが真理として究められた以上、あくまで真理性を主張することができる。否、あえてその真理性を擁護しなければならぬ。だが、諸君、同時に、諸君はその真理が、さらに一段と高い真理に進みうる道を、そこに開いておかねばならぬ。実にこの道こそ、真理のなかにおける懷疑である……」

ユリアヌスは遠くに聞えるリバニウスの講義に耳を傾けていると、自分がいつの時代にいるのか、どこにいるのか、わからなくなっていった。それは何も現在ではなく、プラトンの時代でもいような気がした。ここにいるかわりにアテナイの学堂にいても、何の不都合もないような気がした。そして彼がユリアヌスではなく、別の誰かでもいような気がした。プラタナスの葉がさやさや鳴っていた。眼をあげると、廻廊にかこまれた四角い空が、柱と柱のあいだに青く見えていた。雲が淡い紫の<sup>かげ</sup>翳りを帯びて動いていた。祖母の家で見た雲とは、もう色も輝きも違っていた。

(前掲書 第3章 幽閉の終り)

(注) リバニウス 古代ローマ(4世紀)の高名な哲学者。皇帝ユリアヌスの師。各地で教え、アンティオキアで死去。

(注) ユリアヌス コンスタンティヌス帝の甥。後のローマ皇帝。キリスト者として洗礼を受けるが、心の底では異教の神々への信仰を抱いていた。地中海古代の危機を救わんがため、古代異教の復興を目指した。32歳で戦没。

(注) 辻邦生『背教者ユリアヌス』 初版は1972年に中央公論社から出版された。問題文の底本には、新潮社『辻邦生全集』4(2004年9月)所収のバージョンを使用した。問題作成の都合上、表記の一部を改めたところがある。

(問1) 問題文【A】のエウセビウスと問題文【B】のリバニウスとは、それぞれどのような立場の人物として描かれているか、説明しなさい。

(問2) 次の問いに答えなさい。

(ア) 下線部にあるような「その真理が、さらに一段と高い真理に進みうる道」が開かれるというような状況を①シフト (の転換) といいますが、①に当てはまる術語をカタカナ5文字で記入しなさい。

(イ) また、①シフトの具体的な事例を1つ挙げなさい。

(問3) 二重下線部の「真理のなかにおける懐疑」について、現代社会の状況をふまえて、あなたの考えを1000文字程度で論述しなさい。